

うめ組研究所開設の軌跡、そして研究発表会へ

～探究心の芽生え、共有することで育まれる科学する心～

芦屋市立宮川幼稚園 兵庫県

「うめ組研究所」から地域、未来にひろがる探究の輪

ザリガニを研究する「うめ組研究所」には、実に多くの人々が関わっています。研究所が設立されるまでの過程では、小学校1年生となった先代の5歳児、子どもと伴走するように探究する保護者のサポートがありました。また、研究発表の段階では、地域の方や中学生、近隣の教育関係者が、子どもたちの成果を一目見ようと集まってきました。活動のなかで、子どもたちはさまざまな年齢層の人々と接しています。しかも、教わったり支えられたりするだけでなく、「授業」をする側にも立っています。こうした経験は、卒園以降も園生活で培った「科学する心」を抱き続け、柔軟に自他の探究を楽しむ生き方の基盤となるかもしれません。身近な人々を自然なかたちで探究に巻き込むための計画、環境構成も参考にあります。

ここが
Point!

子ども、保育者、保護者が生命の営みに心を揺さぶられながら敬意をもって自然物とかかわり、「科学する心」を育てていくことが今後の子どもたちの学びの姿勢に大きくかかわってくる。そして、小学校、中学校、地域の方の力添えをいただきながら、切れ目なく学び続けることについても考えたい。

うめ組研究所開設までの軌跡、そして研究発表会へ

5歳児 / 5月～

幼稚園の西側に金魚やザリガニが棲める池がある。しかし、昨年度の夏、サギやカラスにザリガニが食べられてしまうのを現在の1年生が目撃している。その後、網をはったり、水面を水草で覆ったりはしたものの、気温があがってきたゴールデンウィークの頃にもザリガニの姿を見かけることはなかった。

そんなある日、昨年度の卒園生とご両親が、8匹のザリガニを「プレゼントや。昨日釣ってきたから。見せたって」とパケツに小ぶりのザリガニを連れてきた。「絶対に大事にしてや。見に来るから」「新しいうめ組によろしく」と伝えていった。子どもたちは保育室に来ているザリガニに大歓声。ザリガニが幼稚園に届いた経緯や、池に放すかどうかを話し合っていると、B児「いやだわ。お部屋で見たい。好きになった」保育者「そうなんだ。どんなところが好きになったの？」B児「目」という返事がかえってきた。一瞬、保育室が静かになる。「この目、

黒色の真珠みたいで、すごくきれい」。すると自然に頭を突き合わせながらザリガニをみんなで見はじめた。自分のザリガニの好きなところについて、タブレットを利用しながら語り合いがはじまった。「しっぽがハート型」「しっぽにトゲがある」「ハサミにツブツブがついているのが面白い」など、好きな理由も添えながら伝えあう。

ザリガニって寝ないんだよ

この活動をきっかけに、保育室に“ト口箱”を置いて、ザリガニにとって住みやすい環境を整えて世話をするようになった。ドロや隠れ家、ハサミを強くするために切る葉、クラスみんながザリガニという生き物を通して対話しながら学ぼうとする。担任は生き物の力を借りながら、自分を表現する喜びやザリガニの生活にも夢を広げてほしいと願い、きっかけのひとつとして降園時に「今日もいっぱい遊んだね。また、明日」とト口箱にフタをしていた。「ほんまや、明日も元気だな」「おやすみ」とザリガニと挨拶している子どもが多い中、「ザリガニって寝ないよ」と呟くC児。「え？」と保育者が聞き返すと「だってずっと目を開けているもん」という一言に、ト口箱の蓋を開けてみんなで見る。「目、つぶる時もあるよ」「見たことないけど」「明るいから目をつぶらへんねん」「夜は絶対寝る」と自分の考え方を伝えていた。

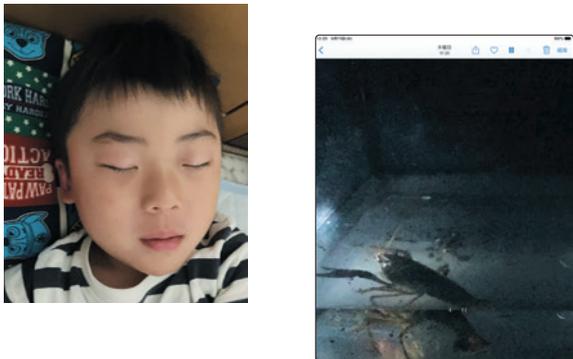
降園時、お迎えにきていた保護者の一人が「うちのお姉ちゃんは時々目を開けて寝ているわ」と笑いながら呟く。担任がそのつぶやきに反応すると「僕はつぶって

しっぽが好き!
ハートの形
しているもん



るよ」「私はどうかな。多分つぶっているよね」と保護者を見る。保育者「そうよね。みんな自分で寝ているところ見たことないもんね」C児「先生、タブレット貸してよ。僕、とってくるわ。で、先生はザリガニが寝ているところ撮って」と言う。保育者「わかった。でも、このタブレットは一台。よし、お家の人に頼もう」とすぐその場で個人情報の保護についても含めて「寝顔写真」をお願いすることになった。

次の日、幼稚園のタブレットに保護者の方がスマートフォンで撮影した「子どもの寝顔」をエアドロップで飛ばしてくれた。早速、大画面で子どもたちの寝顔とタイムラプスで撮った夜のザリガニを順番に映し出していく。ザリガニが動いている様子を見て、夜は「寝てない」と結論づける子や、ザリガニには臉がないことに気がつき、「目を開けたまま寝ているのではないか」と仮定して、後日、目を開けたまま眠る生き物があることや、臉がない生き物を図書館で調べ、みんなに「研究」と称して伝えていた。これが「うめ組研究所」開設につながった。



知っている？研究発表って

6月、A児が「ねえ、みんな研究発表って知っている？研究員はみんなの前で発表するんだよ」と言い始めた。保育者はその話を聞き、「誰に発表するの？」と尋ねると「もちろんお母さん」「小さい組」「去年の大きい組さん」と声があがった。子どもたちは、自分たちで発表したい内容やタブレット役、発表役、質問役、さらには入場曲の選定、装飾を考え自分達で環境を再構成をする。

7月には地域の方と近隣の学校の先生に見ていただく。すると中学校の校長先生から、「ぜひ、中学校へ出前授業に来てほしい」というお誘いがあった。また、地域の中学生や教育機関に公開することとなった。両日とも、発表の最後に「ザリガニはどうやって捕まえるのですか？」「ザリガニは何年生きるのですか？」と次々と新たな質問が客席から向けられた。子どもたちは、どの質問にも臨機応変に言葉や実演を混ぜて答えていった。



問題です。
これは
オスでしょうか？
メスでしょうか？

「科学する心」を感じた **小さなつぶやき**



4歳児

お母さんに聞いたら僕は
予定日通りに生まれたんだって。
**この蝶、予定日を
随分すぎているな**

10月末、羽化しない蛹を見ながらつぶやく。そして4月になり、無事カラスアゲハになった姿をみて「僕調べたよ！冬越しているんだ。だから予定通りなんだ」

実践の背景や全体像、
園の先生による事例分析や考察は
論文をお読みください。

